

まわる・めぐる

杉本 武

1. はじめに

ここで取り上げる「まわる」と「めぐる」は国立国語研究所1964では「2.151,揺れ,振れ」及び「2.152,走り,飛び,流れなど」に分類されており,意味も類似している。また漢字で表記する場合,「廻る」を「まわる」とも「めぐる」とも読ませることがある。この二つの動詞の用法では,

- (1) 知人の家を まわる。
- (2) 知人の家を めぐる。

のように二語が置き換えられる場合もあれば,

- (3) 太郎は次郎の家を まわってから 帰宅する。

- (4)× 太郎は次郎の家を めぐってから 帰宅する。

のように置き換えのできない場合もある。また(1)(2)のように置き換えられても意味に微妙な差があるように思える。以下,この二つの動詞「まわる」と「めぐる」の意味・用法について考察してみたい。

2. 分析の前提

動詞の意味はただ一つしかないというのではない。動詞に様々な用法があることからこれはわかる。派生的用法というものである。

動詞の意味は複数の潜在的な意味素性の束からなっている。そして動詞が文の中に統合されて初めて,その動詞のその構文における意味としてそこにふさわしい意味素性が実現されると考える。つまり,動詞の意味は構文によって決定されるのである。言ってみれば,動詞の意味は全て意味素性の派生的意味なのである。したがって動詞の意味を考察する場合,構文的考察が必要となってくる。

この立場から「まわる」と「めぐる」の意味を考察するために,まず構文の考察から入っていくことにする。

3. 分析

「まわる」と「めぐる」の用例を集めてみると,①ガ格のみをとるもの,ガ格の他に②ヲ格③二格④へ格をとるものに分類できる。以下,それぞれの構文に分けて意味を分析する。

3.1. ガ格のみをとるもの

ここでガ格のみをとるものというのは,ヲ格・二格・へ格を付け加えると非文法的になるものである。したがって

- (5) 杯が まわる。

- (6) 堀が めぐる。

のような,それぞれ「座ヲ」「皇居ヲ」等を省略した用法はここには含めない。

まずガ格のみをとる例文を挙げて,それぞれ「まわる」「めぐる」が互いに置き換えることができるかを調べてみると,

- (7) 車輪が まわる。

- (8)× 車輪が めぐる。

- (9) 目が まわる。

- (10)× 目が めぐる。

- (11) 地球が一回 まわる 間が一日です。

- (12)× 地球が一回 めぐる 間が一日です。

- (13) 時計の長針は一日に二十四回 まわる。

- (14)× 時計の長針は一日に二十四回 めぐる。

- (15)× 因果は まわる。

- (16) 因果は めぐる。

- (17)× 月日が まわる。

- (18) 月日が めぐる。

- (19)× 春が まわって来る。

- (20) 春が めぐって来る。

- (21)× 今年もまた入試のシーズンが まわって来る。

- (22) 今年もまた入試のシーズンが めぐって来る。

のように,「まわる」と「めぐる」の置き換えはできない。ただ『広辞苑 第二版』によると「車輪が めぐる」という用例があるが,私の内省では認められないので一応除外した。

(7)(9)(11)(13)の例文で「まわる」は,ガ格に立つものがそれ自身で回転する運動,つまり自転運動を表わす。一方(16)(18)(20)(22)の例文で「めぐる」は時の経過を表わしている。

「まわる」でガ格に立つ名詞は〔+Animate〕でも〔-Animate〕でも,〔+Human〕でも〔-Human〕でもかまわない。要はそのものが自らの力で回転するか,あるいは他からの力で回転すればいいのである。また「まわる」ものは完全に一回転する必要はない。

(23) ノックとともにドアのノブが まわる。

しかし「めぐる」は時の経過を表わすので、カ格の名詞は自ら制限される。しかしその前に検討すべきことは、同じ時の経過を表わすにしても、「めぐる」の用いられる構文に二通りあることである。つまり(16)(18)のように「めぐる」をそのまま使う構文と、(20)(22)のように「めぐって来る」の形で使う構文とがあり、しかも両者は置き換えができない。

(24) 季節が めぐる。

(25) × 季節が めぐって来る。

(26) 因果は めぐる。

(27) × 因果は めぐって来る。

(28) × 春が めぐる。

(29) 春が めぐって来る。

(30) × 今年もまた入試のシーズンが めぐる。

(31) 今年もまた入試のシーズンが めぐって来る。

ここで、

構文A : N_Aが めぐる N : Noun

構文B : N_Bが めぐって来る

と定めておく。ところで構文Bは〔N₁がN₂に めぐって来る〕のように二格をもとる。しかし構文Bは二格をとらない構文Aと関連し、類似している。また構文Bは「来る」という動詞のために二格をとるようになったと考える。このために構文Bもこの節で扱うことにする。

まずカ格にどのような名詞が立つかみてみると、構文A・Bともに時間的な概念をとる。しかし(24)と(29)とを比べてみると、時間的な概念でも性質が違う。「春」も一つの季節であるが、(24)の「季節」は春・夏・秋・冬の全体としての季節である。そしてこの「季節」にしろ(26)の「因果」にしろ、一つの過程が終わるとまた元に戻るものである。つまりN_Aは時間的に回帰する連鎖の全体である。したがって「時間」のように回帰すると意識されないものはN_Aには立たない。

(32) × 時間が めぐる。

一方の構文Bでは、構文Aの連鎖全体の一部に着目する。したがってこの時の経過も反復的である。

(33) 春が めぐって来る。

(34) × 新春が めぐって来る。

以上から、「めぐる」について整理してみると、「めぐる」はカ格のみをとる場合、反復的・回帰的な時の経過を表わし、〔Nが めぐる〕の構文では、回帰的な時間の連鎖全体に着目し、〔Nが めぐって来る〕の構文では、連鎖の一部に着目する。この全体か一部かという差違は、「めぐる」が「来る」に接続したため

で、「来る」に由来するものであろう。

3.2. ヲ格をとるもの

「まわる」も「めぐる」もカ格とともにヲ格をとる。ヲ格をとる用例を構文別に分類してみると、

1. N sing のまわりヲ V

2. N sing ヲ V

3. N pl ヲ V

 sing : singular pl : plural

 V → {まわる／めぐる}

の三つに分けられる。Nには物体・地点・地域を表わす名詞が立つ。また単数・複数とは、Nに立つ物体・地点・地域が一つであるか、複数であるかということである。以下この分類に従って「まわる」と「めぐる」を分析してみる。

3.2.1. N sing のまわりヲ まわる／めぐる

(35) 地球は太陽のまわりを まわる。

(36) × 地球は太陽のまわりを めぐる。

(37) フェリーがうず潮のまわりを まわる。

(38) × フェリーがうず潮のまわりを めぐる。

(39) 町のまわりを まわる。

(40) × 町のまわりを めぐる。

また「～のまわりヲ」ではなく、「～の周囲ヲ」等でもよい。さらに、

(41) 衛星が軌道を まわる。

(42) 運動選手がトラックを まわる。

のように、ヲ格には「～のまわり・周囲」等だけではなく、環状のものを表わす名詞も立つ。

この構文では「めぐる」は使えない。「まわる」がこの構文をとった場合、ある一つの物体・地点・地域の外部を円を描いてカ格に立つものが移動することを表わす。さらに、

(43) 池のまわりを まわって 向こう側へ行こう。
のように、円の一部の移動、すなわち弧を描く移動でもよい。

以上のようにこの構文では、「まわる」は、カ格名詞がある一つの物体・地点・地域の外部を円または弧を描いて移動する運動を表わし、ヲ格にはその物体・地点・地域の外部、すなわち移動の軌跡を示す名詞が立つ。

3.2.2. N sing ヲ まわる／めぐる

ヲ格にはある一つの物体・地点・地域をとる。しかし、

(44) 地球は太陽を まわる。

(45) 観光客が京都を まわる。

の二文では「まわる」の表わす運動は異なる。(44)は(65)と同じ運動を表わし、ヲ格名詞の示すものの外部での移動を表わす。それに対して(45)はヲ格名詞の示すものの内部での移動を表わす。そこでこの構文を、

1. ヲ格の外部での移動を表わすもの、

2. ヲ格の内部での移動を表わすもの、

の二つに分けて考察をすすめる。

3.2.2.1. ヲ格の外部での移動

(46) 地球は太陽を まわる。

(47) × 地球は太陽を めぐる。

(48) ハイキングで奥多摩湖を まわる。

(49) × ハイキングで奥多摩湖を めぐる。

(50) フェリーがうず潮を まわる。

(51) × フェリーがうず潮を めぐる。

(52) 池を まわる。

(53) × 池を めぐる。

これらは〔N sing のまわりヲ まわる〕と同じく、ある一つの物体・地点・地域の外部を円または弧を描いて移動する運動を表わす。そしてヲ格には運動の中心を示す N sing が立つ。またこの構文でも「めぐる」は使えない。

しかし(46)(48)はあまり落ち着いたいい表現ではない。〔Nヲ〕ではなく〔Nのまわりヲ〕の構文をとった方がよい。また(50)(52)は曖昧である。これはヲ格名詞が単数とも複数ともとれるからで、複数ととると構文が異なり、意味も違ってくる。その場合「めぐる」も使えるようになる。このことは〔3.2.3.〕で扱う。

またこの構文でも〔N sing ヲ まわる〕の構文と同じように、移動の軌跡は円ではなく弧でもよい。

(54) 池を まわって 向こう側へ行こう。

(55) バスコ・ダ・ガマは喜望峰を まわって イン
ドに達した。

(56) 通行人が角を まわる。

これらは障害物等があって直進できないので迂回して進むことを表わす用法である。

先に「めぐる」はこの構文では使えないとしたが、

(57) 堀が城を めぐる。

(58) 柵が庭園を めぐる。

のように、移動ではなく状態を表わす時には使われる。「まわる」にはこの用法はない。

(59) × 堀が城を まわる。

(60) × 柵が庭園を まわる。

この構文で「めぐる」はヲ格に立つものがヲ格に立つものを取り囲んでいる状態を表わす。しかもヲ格の全体を取り囲んでいなければならない。

(61) × 堀が城の東側を めぐる。

(62) × 柵が庭園の道路側を めぐる。

さらにこの状態的な用法から

(63) この問題を めぐる 討論。

という派生的用法が生じる。

3.2.2.2. ヲ格の内部での移動

(64) 観光客が京都を まわる。

(65) ? 観光客が京都を めぐる。

(66) 休暇に外国を まわる。

(67) ? 休暇に外国を めぐる。

(68) 巡査が夜の町を まわる。

(69) × 巡査が夜の町を めぐる。

以上のようにこの構文では「まわる」が使え、ヲ格で示される地域の内部をあちこちと移動することを表わす。しかし、(65)(67)の例文の認定に関しては個人差がある。これは〔3.2.3.〕と関係があるので、そこで扱うことにする。

3.2.3. N pl ヲ まわる／めぐる

この構文では「まわる」も「めぐる」もヲ格で示される複数の物体・地点・地域を経由する移動を表わす。

(70) 気に入った洋服を探してあちこちのデパートを
まわる。

(71) 気に入った洋服を探してあちこちのデパートを
めぐる。

(72) 各地の名所・旧跡を まわる。

(73) 各地の名所・旧跡を めぐる。

(74) 知人の家を まわる。

(75) 知人の家を めぐる。

以上のように「まわる」も「めぐる」もこの構文をとるが、ニュアンスが違うようだ。

(76) 各地の名所・旧跡を 足早に まわる。

(77) × 各地の名所・旧跡を 足早に めぐる。

このように「めぐる」には移動の経過は含まれない。したがって「まわる」は運動そのものを示し、「めぐる」は経由点の存在を必要とする。このことから他の構文でなぜ「めぐる」が使えないかがわかる。経由点がないからである。したがって〔N sing ヲ〕の構文で、ヲ格に地域をとり地域内部での移動を表わす場合でも、地域内に経由点を想定できれば「めぐる」も使うことができる。(3.2.2.2.)の(65)(67)の認定には個人差があ

るとしたが、これは、この経路点を想定できるか否か個人によって違うためである。

(78) 総理大臣が遊説で地方をめぐる。

この場合は「地方」という地域の中に何々地方、何何県という経路点を想定できる。

また「めぐる」では再び出発点に戻らなければならない。

(79) タンカーは途中の島々を まわりながら 産油国に向かった。

(80) ×タンカーは途中の島々を めぐりながら 産油国に向かった。

3.3. ニ格・へ格をとるもの

「ニ」も「へ」も現代語ではほぼ同じように使われ、以下の例文でも両者を同じように使えるので、ここでまとめて扱う。

(81) 友人の家に まわって 帰る。

(82) ×友人の家に めぐって 帰る。

(83) 大通りを横断するときは、あちらの歩道橋に まわって下さい。

(84) ×大通りを横断するときは、あちらの歩道橋に めぐって下さい。

(81)も(83)も目的地へ直接行かず、ニ・へ格の場所を経由して、寄り道をしたり、迂回りをすることを表わす。これは〔3.2.3.〕の経路点が一か所の場合と考えられる。また、

(85) 敵の背後に まわる。

(86) ×敵の背後に めぐる。

(87) 城の後へ まわる。

(88) ×城の後へ めぐる。

のように、直進せずに迂回してニ・へ格の示す目的地へ行くことを表わすこともある。

4. まとめ

以上の考察をまとめてみるとつぎようになる。

○Nガ V

「まわる」：Nがそのものを中心として回転することを表わす。

「めぐる」：Nには回帰的な時間の連鎖を示す概念が立ち、時の循環を表わす。

「めぐって来る」：Nには反復的な時間概念が立ち、ある時の到来を表わす。

○N sing のまわりヲ V

「まわる」：N sing がある一つの物体・地点・地

域を示し、それを中心として円または弧を描く移動を表わす。ヲ格には他に、移動の軌跡を示す名詞もとる。

○N sing ヲ V

「まわる」

1. ヲ格外部での移動：ヲ格で示されるある一つの物体・地点・地域を中心として円または弧を描く移動を表わす。〔N sing のまわりヲ V〕と同じであるが、この構文の方は曖昧であることがある。

2. ヲ格内部での移動：ヲ格で示されるある一つの地域の中をあちこちに移動することを表わす。

「めぐる」：カ格に立つものがヲ格に立つものを取り囲んでいる状態を表わす。

○N pl ヲ V

「まわる」：ヲ格で示される複数の物体・地点・地域を経由する移動を表わす。運動そのものに注目する。

「めぐる」：「まわる」と同じだが、経路点の存在に注目する。

○N ニ／へ V

「まわる」：ニ・へ格の示す場所を経由して目的地へ行くこと、あるいは直進せず迂回してニ・へ格の示す目的地へ行くことを表わす。

5. 問題点

「まわる」と「めぐる」は一般に類義語とされている。ここでも類義語として分析してみたが、用法が重なるのはごく一部であった。このため類義語の意味論的分析というよりも、二語の用法の分類になってしまった。

また「めぐる」がいくらか文語的な言い回しであることも例文の検討の上で影響があるようだ。

言語経歴：1958年11月東京都豊島区生。

3歳～埼玉県朝霞市